



発行 2010年12月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel / Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

.....
小ネズミたちとの知恵比べ

周辺に生息するネズミ科のヒメネズミ・アカネズミ・スミスネズミの3種とカヤネズミの巣、トガリネズミ科のジネズミの合計5種類の生息を確認している。毎年のことだが、寒さの厳しい頃になると天井裏が騒がしくなる。夜中に屋根裏の断熱材の上を軽快に走り回る足音が聞こえてくるので、ふすまをバンバンと叩くと静まる。どこから侵入してくるのかヒメネズミが部屋の中を走りながらゴマ粒のような糞を撒き散らしていく。植物の種子が好物ということで、先日は銀杏を一袋綺麗に持っていかれた。一体何回往復したのか勤勉なことだ。数日後に椅子の座布団を持ち上げたら、下に7粒ほどの銀杏が隠されていた。折角の冬の貯えで気の毒だったが、取り返してトラップの餌にさせてもらった。さらに昨年までは乾麺類は齧られなかったのが、今年はやられた。私の緊急食なのに。



トラップの底で観念するアカネズミ

当ニュース 12 に紹介したヒメネズミとの知恵比べで、ゴキブリ・ホイホイでは逃げられたがペットボトルのトラップはうまくいった。2本のボトル1本での罠は餌だけ食われて飛び出して逃げられた。2本をつなげてセットしたら、夜中にジャンプしてはポトッと落ちる音が出て、してやったとほくそ笑んだ。ところが、今シーズンはこの2階立ても餌を食って逃げた奴がいる。垂直飛びのヒーローは一回り大きいアカネズミであった。乾麺を食ったのもそうらしいが、丸々と太って可愛い姿の小ネズミである。捕らえたヒメネズミはトラップごと外に出しておいたら1~2時間でダウンしてしまったのには驚いた。パニックに陥ってのことか寒さのためなのか分からないが、なんとなく可哀そうであった。この寒い生野の山中で活動していて寒さに弱いということもないだろうと思うのだが。

一方のアカネズミは体が大きいためか死んでいなかったのだから川向こうの藪に‘放獣！?’した。我がNPOの事務局長さんの畑ではサツマイモが齧られて困るのでネズミ捕りを仕掛けているが、いくらでも掛かるとのことだった。先日、校庭の花壇の横に吐しゃされた2匹のネズミの半消化された物が転がっていたが、ネズミを食いすぎた獣がいたようだ。

ペットボトル2段でもクリヤーされるので、3本をつないでみた。トラップの入り口の上に置いた誘いのピーナッツは食っていたがトラップには掛からなかった。少々深すぎてさすがの忍者も飛び込めなかったのだろう。そこで、針金に銀杏を付けて入り口から10センチほどの所に吊るしたら、見事に捕獲できた。銀杏に孔を開けて少し曲げた針金を通して落ちないようにしておき、誘いを掛けてみた。釣られたネズミが銀杏に飛びつくとその体重で銀杏が抜けて落下するのだ。今シーズンはまだまだ知恵競べ根競べが続きそうだが、例年ではヒメネズミだけだったのに、今月はヒメ2匹に対して13匹のアカネズミがトラップに入った。それもまだ明るい内から活動を始めるアカネズミには、こちらがなめられているような気もする。机に向かって作文中、足元にチョロチョロと出てきてトラップに落ち込む様子を見た時には思わず「やった！」と叫んでしまった。

アカネズミが次々と侵入してくるのは、やはり山の餌不足の影響なのだろう。当ニュースの前号にも書いたが、畑のダイコンを齧ってしまうなんて追い詰められている餌事情をうかがわせるものだと思う。ネズミなんかいなくなれば良いと思う人もいることだろうが、ネズミを餌として生きている獣もあり、小ネズミたちが種子をあちこちに運んで隠すことが植物の分布を広げるにも繋がっていることを考えねばならないだろう。

.....

孵出できぬハンザキの幼生

ハンザキの卵は9月上旬に生まれ10月下旬頃に孵化する例が多い。しかし、ハンザキの卵はニワトリのように21日で殻が割れて孵化するのとは違う。孵化が近づくと月のクレーターのような物ができてくる。多分、額部分から孵化酵素のようなものが分泌されてカプセルが溶けていくのだと考えられる。しかし、胚はカプセル内で動き回るのであちこちにクレーターができる。うまく外部まで溶けると卵内の液体と共にスムーズに孵出することができる。だがこのタイミングがずれるとカプセルは縮んで、もがきまわることができないままになってしまう。今年も3卵が12月23日現在このような状況(写真2)である。以前に4か月も遅れて人工孵出させた個体は背骨が曲がったままになってしまった。

他の幼生と2か月も遅れても孵出できない3卵を切開して強制的に出した。2匹は背骨が曲がっていたが(写真3)、頭が出かかったまま体が真っ直ぐであった1匹は正常な姿である。脊椎骨が曲がってしまった幼生は生きていくのは難しいことだろう。自然の巣穴でこのようなことが起こるのかどうか分からないが、飼育下では2回目のことである。卵がジューズつなぎになっていないで1粒ずつバラけていることが原因かなとも思うが分からない。自然界でも起こることなのだろうか？



写真1 ペットボトル製のネズミトラップ



写真2 孵出できぬハンザキの胚



写真3 強制孵出させたが背骨が曲がっている



写真4 枝打ち後のヒマラヤシーダー



写真5 宍粟市教育委員会職員による
マイクロチップ打ち込み実習



写真6 台湾の大学院生

ハンザキ研の5年間における10大ニュース

- 2005年 4月 閉校の黒川小中学校の視察で教員宿舎が残されていた(住み込みだ!)
- 2006年 5月 旧・朝来郡4町役場からの大量の備品を受贈
- 3月 朝来市河川観察ステーション完成(宝くじ協会など1千万円助成金)
- 2007年 6月 校地に接する範囲の市川が禁漁区として認められる
- 12月 オオサンショウウオ保護センター完成(約2,000万円)
- 2008年 4月 NPO法人設立総会開催(8月に兵庫県より認証される)
- 7月 カモガワ・ハンザキ(ハイブリッド)6個体受け入れ
- 9月 ハンザキのバトル撮影初成功(世紀の空中戦?)
- 10月 オオサンショウウオの会 in 朝来大会開催
- 2010年 3月 1975年以来300回目の調査となる

この他にもまだまだ多くの出来事があったが、振り返って見ると実にタイミングよくというか本当に運よく良い方向へ、良い方向へと進んできたと思う。教員宿舎は住み込みで調査ができることにつながり、アンコ淵の繁殖巣穴から20~30羽というこれ以上望むことの無い場所であり、観察カメラを設置してパソコンでモニタリングできることになった。事務室に机椅子などの備品類が揃っていることを何とも思わない方が多いが、これだけの量をそろえるには大変な経費がいる所なのだ。宝くじ協会からの助成金も有難いことで子供たちの環境学習施設としてなくてはならないものになっている。それと共に漁協の理解の下に禁猟区が設定できたことも幸いだった。近くでの河川工事が計画されて児童用のプールがハンザキ保護センターとして改造されたことで、多くの人々にハンザキの姿をお見せすることができるようになった。NPO化は個人では対抗しがたいハンザキの生態解明に向けて若い人にバトンタッチするべく整備を進めることができつつあると思う。

カモガワ・ハンザキは困った問題(外来生物、交雑種)だが、日本産との比較ができることになった。繁殖期におけるオス同士の闘争は多くの首切り死体の存在で証明できていたが決定的な空中戦のような写真や動画を残せたことは、そのときの興奮を多くの方に伝えることができた。オオサンショウウオの会を立ち上げて第5回大会を主催できたことも忘れられない。そして調査を開始して35年目で300回の調査を達成することができた。1回の調査日数は色々なので単純に回数だけをみても仕方がないことだが、総日数1,485ということになる。昭和時代の15年間は思うような成果も出ないまま、そんなことをやっていても仕方がないだろうと批判もされたことがあった。それでも継続させることができたのは素晴らしい自然環境の中に溶け込んでの調査の魅力だろう。そして今、退職して6年が過ぎようとしているが、現役時代には考えることもできなかったような恵まれた環境が整いつつある。今はとにかくハンザキの保護保全のために次世代へバトンタッチできる態勢を速く確立したいと考えている所です。50年百年後を夢見つつ・・・

年間の来訪者数

今年の夏休みには見学者が相次いで、一人では対応しきれなくなった。この5年間とはにかくハンザキとハンザキ研の存在をできるだけ多くの方に知っていただくことを最優先として見学に応じてきた。それも限界に来たようだ。新しい年度には今後の公開の方法を模索していかなばならないと思っている。

年	団体/人数	公務	業務	地域	職員	報道	見学	日直	栃本	総計
2005	1/ 8	12	2	9	15	0	0	0	19	65
2006	9/235	77	100	239	106	5	106	0	175	1,043
2007	24/383	187	157	232	112	143	268	33	290	1,805
2008	29/540	140	165	137	312	124	651	480	310	2,859
2009	13/211	168	214	113	393	57	1,110	716	328	3,310
2010	44/685	153	239	60	398	77	957+	715	351	3,635+

2005年は教員宿舎の整備ができていなかったの、比較できないが、それ以後は年々の来訪者数が増加し続けている。中でも団体の増加は歓迎する所だ。公務は自治体から、業務は企業からの来訪である。地域の方の来訪数が減少しているのは、少々残念なことだが一度みたからということもあるだろう。見学者数は+を付けたように夏の見学者数をつかむことができなかったことによるが、実数は前年を上回ることは確実だと思う。日直は皆勤ならばのべ730人になるところであるが、不足分は私がカバーしたことになる。栃本の年間滞在日数が351と言うのはこれ以上の日数は無理だろうと思う。この日数は、やはり生き物の飼育に対する懸念、安心して留守にできないと言うことに他ならない。

留守にしたときに限って何かトラブルが発生するのも困ったものであるが、それも偶然の出来事であり仕方ないと思う。平成23年度の試験放流や本放流まで気の抜けないことであるが、これが生き物を飼育するという仕事の宿命であると思う。物言わぬ生き物の飼育管理は、飼育係がいかにその顔色を読み取っていかに早く対処できるかどうかにかかっている。瀕死の人間に対する特効薬などはないのと同様に、早期発見の早期治療が特効薬なのだから。この冬も12月半ばから越年である。3年連続のことであるが静かな正月でいい。雪がしんと降り積もる中で、数日間も口を利くことも無く様々なことを考えながら過ごすことができる。

来訪者の数が増えるのは嬉しい悲鳴とも言える。逆に世間から見向きもされない施設では単なる自己満足の範囲にあり、役に立たない無駄な施設と言うことになるだろう。何とか有料公開施設として整備できることを願ってスタッフと共に新たな年はチャレンジしていきたいと思う。それがハンザキの保護にも地域の活性化にも繋がっていくことになると思う。

- 1日 ・宍粟市教育委員会、環境創造課、観光課の7職員来所
・人工巣穴にヌシの姿は無いが、幼生は順調の様子
- 3日 カヤネズミの巣受贈
- 4日 NPO 事務局会議 8名
- 5日 ・台湾の大学院生3名視察に来所、兵庫県立大・太田教授の紹介で
・朝倉サンショ1本受贈(トゲ無し)
- 7日 京都府福知山市文化財保護審議会委員8名来所
- 8日 事務局長のヒマラヤシーダー枝打ち約100枝開始(樹高27㍎、胸高囲2.3㍎)
- 9日 初雪
- 10日 ・オオサンショウウオ月例定期健康診断
・簾野の人工巣穴、ヌシ不在
- 11日 日本工科専門学校・学外実習(揖保川吉島統合頭首工の魚道モニタリング、姫路市伊勢環境学習センター)
- 12日 オオサンショウウオ保護センターの1号ポンプ不調
- 15日 円山川水系自然再生推進委員会技術部会(円山川防災センターにて)
- 16日 ハンザキ研ニュース 59刊行
- 21日 宍粟市教育委員会、マイクロチップ打ち込み実習に来所
- 22日 県養父土木事務所、オオサンショウウオ保護センター1号ポンプのチェックと工事後の予定について検討に来所
- 30日 初積雪、銀世界となる

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

台湾の大学院生3名が見学に来て来た。その昔、台湾旅行から帰国した未成年者がチュウゴク・ハンザキの未成体20匹を持ち込もうとした。ワシントン条約違反で所有権放棄緊急保護として姫路市立水族館に収容したことがあった。無論、台湾にはハンザキはいない。学生たちはハンザキを珍しがって盛んに撮影していたが、水溜りの氷を見つけて手に取って感心していた。南国からのお客さんだな！と面白く思った。

宍粟市や福知山市からの視察が相次いだ。ハンザキの保護に関する意識が広まってきた証として嬉しいことだ。天然記念物の保護の最前線にある各自治体の担当者は、ほとんどが埋蔵の専門家である。残念ながらハンザキへの対応は十分ではないのが現状であるが、そんな中でも養父市や豊岡市に続いての動きが出てきたということである。宍粟市では、さっそく緊急保護された個体を当研究所に持参して、測定やマイクロチップ挿入の実習を行った。器具やチップの用意も大変だろうが、他の多くの自治体にも期待したい。

(本誌は「三井物産環境基金」の助成を受けて作成しています。)